

高齢者世帯における子世帯との「交際費」の行方

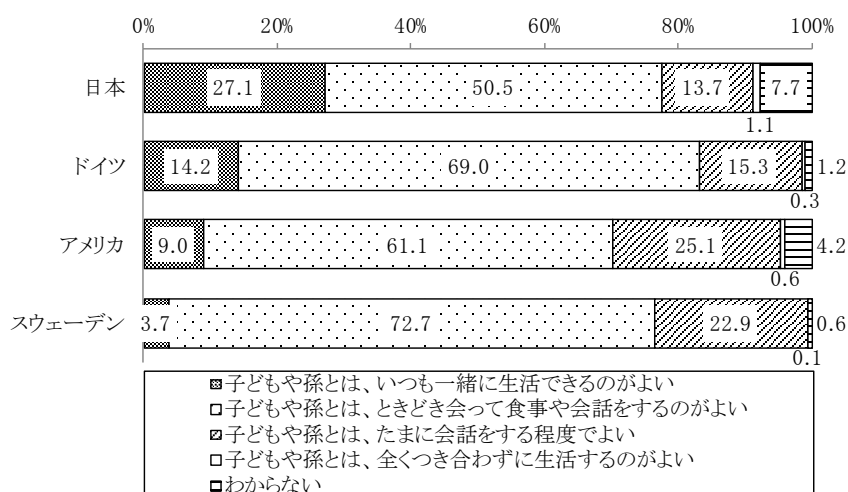
上席主任研究員 北村 安樹子

＜老後のライフデザインと世代間関係＞

日本では介護保険制度が始まった2000年頃から、老後の子や孫とのつきあい方についての価値観が大きく変化してきた。内閣府が60歳以上の男女に行っている時系列調査でも、1980年時点では「子や孫とはいつも一緒に生活できるのがよい」とする人が約6割を占めていたが、最新の調査結果では「子や孫とは、ときどき会って食事や会話をするのがよい」とする人が最も多く50.5%を占める（図表1）。また、「子どもや孫とは、たまに会話をする程度でよい」とする人も1割を超え、さらに一步距離を置いた関係を志向する人々が一定割合を占めるようになってきている。

ただし、日本では「いつも一緒に生活できるのがよい」とする人が3割弱と、ドイツ（14.2%）、アメリカ（9.0%）、スウェーデン（3.7%）などと比べれば、依然やや高いのが現状である。しかし、高齢期の家計を考えると、今後は日本でも老後はできるだけ自立した生活を送ることを重視し、子や孫とは「ときどき会って食事や会話をするのがよい」とする人や「たまに会話をする程度でよい」とする人がもう少し増えていくのではないだろうか。

図表1 老後における子や孫とのつきあい方に関する意識（国際比較）



資料：内閣府（2016）『平成27年度第8回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査』より作成

<高齢者世帯の家計と「交際費」>

実は、高齢者世帯の家計では、子世帯へのお祝い金や贈答品にかかわる支出が無視できない割合を占めている。総務省の家計調査で世帯主が65歳以上の高齢者世帯の消費支出をみると、交際費は約1割を占めており、世帯主が65歳未満の世帯と比べた場合、1.80倍の水準となっている。

図表2 消費支出の10大費目内訳および構成比(2017年、2人以上の世帯)

	1世帯あたり1ヶ月間の支出金額(円)		構成比(%)		世帯主が65歳未満の世帯に対する倍率
	世帯主が65歳以上の世帯(高齢者世帯)	世帯主が65歳未満の世帯	世帯主が65歳以上の世帯(高齢者世帯)	世帯主が65歳未満の世帯	
世帯人員(人)	2.45	3.39	-	-	-
世帯主の年齢(歳)	73.8	48.6	-	-	-
消費支出	247,701	310,455	100.0	100.0	-
食料	70,058	75,046	28.3	24.2	1.17
住居	14,853	17,876	6.0	5.8	1.04
光熱・水道	21,635	21,457	8.7	6.9	1.26
家具・家事用品	10,273	10,783	4.1	3.5	1.19
被服及び履物	7,465	13,400	3.0	4.3	0.70
保健医療	14,995	11,225	6.1	3.6	1.67
交通・通信	28,524	48,361	11.5	15.6	0.74
教育	458	19,295	0.2	6.2	0.03
教養娯楽	24,541	30,611	9.9	9.9	1.00
その他の消費支出	54,898	62,398	22.2	20.1	1.10
うち交際費	25,315	17,646	10.2	5.7	1.80

注：表中の金額及び構成比は、表示単位に四捨五入しているため、合計の数値と内訳の計が一致しない場合がある
資料：総務省「平成29年度家計調査」より作成

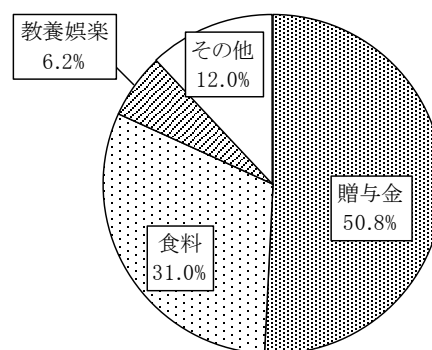
<「交際費」の50.8%は贈与金>

この高齢者の家計における「交際費」に関しては、同省が毎年「敬老の日」に発表する“統計トピックス”でも取り上げられており、子や孫の世帯など世帯外への金品の贈与などが多いためではないかとの見方が示されている

(総務省「統計トピックスNo.103「統計からみたわが国の高齢者(65歳以上)」2017年9月17日)。

この調査での「交際費」とは、「世帯外の人への贈答品・祝い金などのほか、接待用支出や職場、地域などにおける

図表3 世帯主が65歳以上の世帯における世帯外の人との交際費の内訳(2017年、2人以上の世帯)



注・資料は図表2と同じ

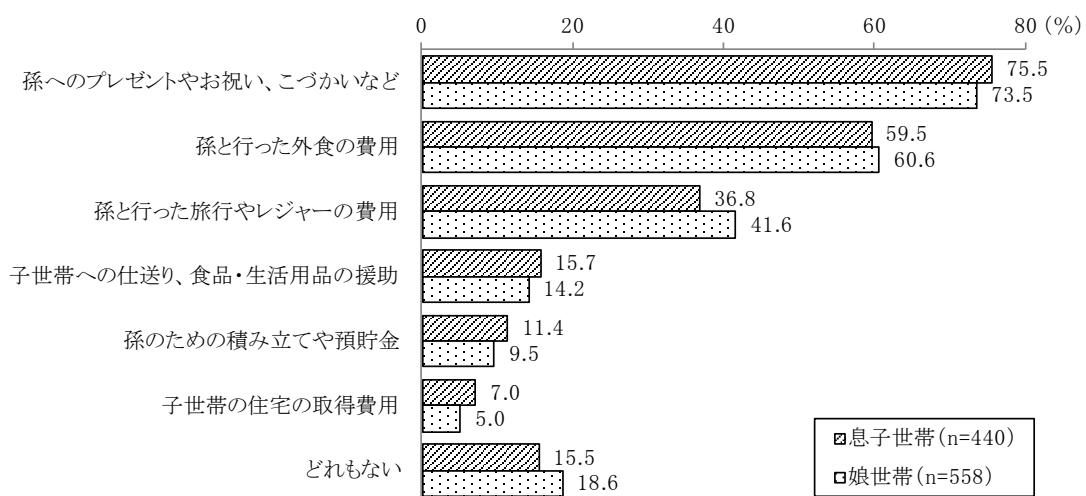
諸会費及び負担費」を指し、世帯外の子や孫へのお祝いや贈答品に関する支出が含まれる。内訳をみると、その50.8%を贈与金が占め、「食料」(31.0%)がこれに続いている(図表3)。

<旅行・レジャーは娘世帯と>

子世帯への経済的支援の内容に関しては、筆者が2014年11月に全国の孫がいる55～74歳の男女1,000名を対象に行った調査でも「孫へのプレゼントやお祝い、こづかいなど」(74.2%)が最も多くあげられており、「孫と行った外食の費用」(60.0%)、「孫と行った旅行やレジャーの費用」(39.4%)がこれに続いていた(北村安樹子「孫の教育・将来に対する祖父母の意識」『Life Design Report』2015年1月)。

これらを孫の親の続柄別にみると、「プレゼントやお祝い、こづかい」や「外食」など多くの項目でそれほど大きな差がみられないなかで、「旅行やレジャー」に関しては、息子世帯(36.8%)より娘世帯(41.6%)の孫との間でより多く行われている傾向が確認できる(図表4)。

図表4 直近1年間に、祖父母が行った経済的支援の内容(孫の親の続柄別)<複数回答>



注：第一生命経済研究所「子世帯とのコミュニケーションに関する調査」より作成

<「交際費」の行方>

医療費や介護保険料の負担増など、高齢者世帯の家計をとりまく状況は厳しさを増しており、祖父母世代の財布の紐も固くならざるを得ない状況が続いている。また、人生100年時代を見据えて60代以降も働き続ける人が増えれば、高齢期以降の家計でも仕事上のつきあいをはじめ、子や孫以外の人との社会関係を維持していくための費用を見込んでいく必要があるだろう。

このような環境下でもなお、高齢者世帯が子世帯との交際費を支出する背景には、

子や孫に介護等の迷惑をかけることがないようにとの思いを抱きながらも、いつまでも良好な関係を保っていきたいと願う親心・祖父母心があると思われる。自助による自身の老後への備えがいつそう求められるなかで、高齢者世帯の家計における子世帯との交際費は、見直しを迫られる機会が増えるかもしれない。

(ライフデザイン研究部 きたむら あきこ)